

め、epidermoidの術前診断にてLt. subtemporal approachを用い手術を施行した。腫瘍は硬膜外に存在し、硬膜内への進展は認められなかった。三叉神経V2は内側前方に圧排されていた。腫瘍は軟らかく、内部は白色でもろい角化物質を認めた。また正円孔の拡大を認め、腫瘍のattachmentは正円孔の板間であった。病理所見は、epidermoidであった。

epidermoidは小脳橋角部や錘体骨先端に好発する。正円孔に発生するepidermoidは我々が渉猟した範囲内では報告がない。一方、近年拡散強調MRIはepidermoidの診断に有効であると報告されている。本例もこれに合致する所見を呈していた。

21 特異なMRI所見を呈したepidermoidの一手術例

久下 淳史・嘉山 孝正・櫻田 香
園田 順彦・斎藤伸二郎・中里 洋一*
山形大学医学部脳神経外科
群馬大学医学部第一病理学*

【はじめに】epidermoidは、MRIのT1およびT2強調画像のみではなくも膜嚢胞との鑑別がしばしば困難であったが、拡散強調像にて高信号を呈することが明かとなり、この所見が疾患特異的所見なものとして用いられている。しかしながら、今回、特異なMRI所見を呈したepidermoidの手術症例を経験したので、その画像所見および手術所見に関して若干の文献的考察を加え報告する。

症例は64歳、女性。初診時のMRIで、左小脳橋角部にT1でやや高信号、T2では低信号の径3cm、前橋槽にT1およびT2で高信号を呈する径2.5cm、右小脳橋核部にはT1で等信号、T2で低信号を呈する2cmの腫瘤をそれぞれ認めた。これらの腫瘤は拡散強調画像では高信号は呈さず、術前診断dermoidにて手術を行った。しかしながら術中所見では、腫瘤は部位により暗褐色やxanthochromicな内溶液を含む嚢胞で内部に緑色の垢様物を含む部分と、典型的なepidermoid cystのwallの所見を呈する部位が混在しており、病理

組織学的には著明な角化を示す重層扁平上皮と一部上皮下にヘモジデリンを含むxanthogranuloma様の所見を呈するepidermoidであり、特異なMRI所見はこのヘモジデリンが関与したものと考えられた。

【まとめ】epidermoidの中にも、本症例のごとく拡散強調像で高信号を呈さないxanthogranulomatousな腫瘍の場合があり、診断の際には注意すべきものと考えられ報告した。

22 頭蓋内chordomaの再発に伴うDNAコピー数異常の変化：3例報告

佐々木輝夫・荒井 啓史・阿部 深雪
別府 高明・小笠原邦昭・小川 彰
岩手医科大学脳神経外科

【目的】頭蓋内chordomaは組織学的には良性腫瘍であるが、実際は完治困難であり、臨床上の悪性腫瘍である。しかし、比較的稀な腫瘍のため分子生物学的検索の報告はほとんどない。我々はcomparative genomic hybridization (CGH)を用いて、頭蓋内chordomaの初発時・再発時のDNAコピー数異常の変化について検討した。

【対象・方法】chordoma 3例の初発時・再発時組織(6検体)を対象とした。正常リンパ球・腫瘍組織よりDNAを抽出した後、nick translation法にて各々をSpectrum Red, Spectrum Greenで標識し、DNA probeを作成した。両probeを正常染色体標本上で競合的にhybridizeさせ、CCDカメラで画像を取り込み、ソフトウェア上で解析した。

【結果】DNAコピー数異常は平均で初発時10.3個、再発時16.0個と再発に伴い増加した。全例で初発時より13番染色体長腕(13q)のDNAコピー数の減少(loss)を認め、再発時2/3例で新たに22番染色体長腕(22q)のlossを認めた。

【結論】組織学的には良性に分類される腫瘍であるが、DNAコピー数異常は多様であり、さらに再発に伴う変化も認めた。また、13q lossがchordomaにおける生物学的な特徴の1つと考えられた。